

Title	ベルクソン記憶論における再認の問題
Author(s)	天野, 恵美理
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87776
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 （天野恵美理）	
論文題名	ベルクソン記憶論における再認の問題
論文内容の要旨	
<p>本論文は、ベルクソンの第二主著『物質と記憶』（1896年、以下MM）の解釈に向けて、「再認」の問題、とりわけ再認の種別化の問題を通じてアプローチする。</p> <p>再認とは、ある知覚対象を既知のものとして同定する働きである。</p> <p>前著『意識の直接与件についての試論』（1889年、以下『試論』）においてベルクソンは、我々の意識について、万人に共通した記号的な相に隠れて見えづらくなっている「意識の直接与件」すなわち「純粹持続」の相の根源性を主張した。その一方で、石井が指摘する通り、『試論』は再認の問題という重大な問題を後に残した。というのも、『試論』で示された純粹持続の相の下では、外的対象はそれを知覚する各人に対してそれぞれ独自の仕方で現れることになり、これはバラであるとか椅子であるといったごく普通の認識つまり再認を説明する必要がかえって生じてしまうからである。</p> <p>それゆえベルクソンはMMにおいて、自身の哲学において外界を論じるにあたり必要かつ決定的な一歩として、再認の問題に対処する。ベルクソンは、再認とは何かという問題について当時支配的だった諸説を批判した上で、再認の種別化という独自のアプローチを通じて「再認の基礎」を見出そうとする。MMにおいて再認の問題が中心的に語られるのは第二章においてであり、そこでは「自動的再認」と「注意的再認」という二種類の再認が提示される。「自動的再認」とは基本的に、身体的自動運動による再認であり、そこにおいては記憶（「イメージ記憶」）の介入はない。「注意的再認」とは対象に即した知的な再認である。こちらの再認は記憶の介入を要求し、記憶がますます介入することで注意的再認は進展し、外的実在のより深い諸相が我々に明かされる。注意的再認の進展の仕組みは、拡大する回路の図において示される。これら二種類の再認について、問題は——先行研究においては注目されていないが——、種別化の規定が実は明確ではないことである。</p> <p>こうした問題は、「注意的再認」と、私の過去の歴史に由来する個人的ニュアンスを持った夢のような記憶すなわち個人的記憶との関係に関して顕著に現れる。実際、MMでは、個人的記憶全てを底面とする逆円錐の図が第三章において示される。そして、ドゥルーズや杉山といった多くの先行研究においては、逆円錐の図と回路の図とが重ね合わせられるものと考えられている。それらの解釈に則った場合、回路の拡大つまり注意的再認の進展については次のようになる。すなわち、注意的再認が進展すればするほど、記憶の領域においては、個人的ニュアンスを持った記憶が姿を表すことになるのである。しかし、ますます個人的で夢ようになっていく記憶が、外的実在へのますます深まる理解に寄与する、というのは奇妙ではないか。</p> <p>そこで本論文においては、「注意的再認」を中心として、ベルクソンがMMにおいてなした再認の種別化の実情を明らかにし、またそのことの意味を示す。</p> <p>我々は、「注意的再認」に対して然るべき境界画定を施し、MMにおける種別化の事情を見極めるために、1896年のMM公刊の数ヶ月前に、「近日中に刊行予定の書物の第一章の抜粋」として雑誌掲載された、MM第二章のヴァリエントである雑誌論文「記憶と再認」（以下MR）と、1903-4年度のコレージュ・ド・フランス講義『記憶理論の歴史』（以下記憶講義）とを参照する。というのも、我々の見るところでは、MRからMMを経て記憶講義へと進むにつれて、再認の種別化について、次第に、テキストが現に示している内実に相応しい仕方で明示されるようになっていくからである。記憶講義においては、二種類ではなく三種類の再認が区別される。第一に、動物もなしているような、単なる身体的自動反応によって知覚を利用するだけの再認（①）、第二に、身体運動に規則づけられつつ、対象に即した知的な再認としてある注意的再認（②）、そして第三に、個人的記憶が出現する再認、個人的再認（③）である。我々はこの区別が、MMにおいても立てられるべきものであると考える。つまり、多くの先行研究の解釈や、またベルクソン自身の表面的な記述にもかかわらず、MMにおいても記憶講義と同様、三種類の再認を区別すべきだということである。</p>	

MMにおいては、個人的記憶が出現する再認については、MM第三章において円錐図に即して語られる一方で、第二章の再認の理論においては、上にも述べたように種別化の規定が明確ではない二種類の再認が区別されるのみであるため、注意的再認において、いずれは個人的記憶が現れると想定されてしまうのである。しかしそれでは外的実在の深みを明かすものとは言えないだろう。

本論文の構成は次の通りである。

以上を踏まえ、まず第1章と第2章では記憶講義を扱い、そこにおける再認の種別化を確認する。第1章では、三種類の再認について示す。②を特徴づけるのはその起動段階(②-1)における「図式」の働きであり、この再認においては、知覚対象を能動的に再生産するために我々がなすべき動きを見抜くことが、そのまま、対象を分節・分析すること、理解することだという点が肝要である。また、②には多くの場合に後続段階(②-2)でイメージ記憶の介入があり、それによって②がますます進展することが可能である。①と②とは、いずれも(半)自動的身体運動傾向によるものという共通点がある一方で、次のような対立点がある。①は、対象を我々の動物的・生命的な利害関心のために利用することにおいて自然の方向に従うものであるのに対して、②は、能動的に知覚へと立ち戻り、知覚を明晰化する点において、自然の方向を逆戻りする。また、③が私の個人的な過去へと無益に遡る再認であるのに対して、①および②は、「非個人的再認」であり、そこにおいては過去へと遡ることを強いるものは何もない。①および②では、「我々は対象を対象として再認している」が、③では「我々は対象を我々として再認している」とされる。

第2章では、以上三種類の再認形態から引き出される記憶力の全貌を、そこで図示される円錐形に即して確認する。円錐の頂点には①、底面には③、間の断面には②がそれぞれ位置付けられる。記憶力の全体を円錐形で表すことの意味は、①単なる自動的身体反応に向かわせる力と③単なる夢想に向かわせる力という反対方向の二つの力ないし二つの記憶力の対峙から成るひとつの全体における両者の間の様々な力関係として、その時々々の記憶の現れ方——元手となるのは底面に位置する同じ個人的記憶全てである——のヴァリエーションを説明できる点にある。したがって、円錐図で示されるのは現に②が選択され進展するよりも手前の局面である。そうして、②においては、元は底面に位置していた個人的記憶が脱個人化して、知覚を有益に補うことのできる非個人的な記憶となり、こうした非個人的記憶が知覚へと投射され、②がますます進展し、知覚はますます分析されていく。以上から、記憶講義においては、②がますます進展していく場面においては、記憶力を通じての分析がますます進んだところで、③において認められるような、夢のような「個人的な記憶」のそれ自体としての出現は起こり得ないことが確認される。

第3章と第4章では、以上で記憶講義について見てきた事柄に照らして、MMにおいて事情がどのようなものであるかを、必要に応じてMRも参照しつつ確認する。第3章では、MMで区別される二種類の再認のうち、「再認の基礎」たる「自動的再認」について検討する。そこで明らかにされるのは、MM第二章において①と②とに対応する再認形態が見出される一方で、「自動的再認」と「注意的再認」という二種類の再認の種別化は、完全に一致するものではない二重の基準によってなされており、MMで「自動的再認」として括られるもののうちには、①と②-1)との双方が含まれていることである。つまり②-1)は「自動的再認」と「注意的再認」との双方に股をかけている。MRと比較すると、こうした点にベルクソンが意識して修正を行っていたことが分かる。MRの時点においては②-1)の位置付けは一層不明瞭なものであった。

第4章では、再認における記憶の出現について、MMにおいて事情がどのようなものであるか検討する。まずは、MM第二章においても、記憶講義で確認されたものに相当する二つの記憶力の対立が見出されることを確認する。次いで、MMにおける注意的再認の性質について改めて確認した。MMにおける注意的再認は記憶講義の②と同様のものであり、MMにおいても、②-1)、②-2)の両段階ともに対象の明晰化を目指してなされることを確認する。言い換えると、MMにおいても②注意的再認は、「対象を我々として再認する」のではなく、「対象を対象として再認する」ものだというのである。MMにおいても記憶講義同様、②の進展すなわち回路の拡大は、あくまで対象を分析・明確化するために従うものであることも確認する。さらに、記憶力の円錐形(記憶講義とMMとで同様の円錐図が描かれる)の示す事柄も記憶講義と同様であることを確認する。その上で、円錐図および回路の図に即してなされる説明を検討し、両者において「反復」や「膨張」・「緊張」といった同じ表現が用いられているにもかかわらず、それらの表現が示す内容が異なるものであることを示す。円錐図における「反復」や「膨張」・「緊張」については先行研究で頻繁に語られてきたが、回路の図におけるそれらについては、円錐図と回路の図を重ね合わせ可能と見る見方が一般的なものである以上、ほとんど語られていないに等しい。回路の図における反復は、閉じた現在とでも言うべき時間様相におけるそれである。さらに、MM第一章で示される「純粹知覚」——「事物についての我々の認識の基礎」にある「非人称的な知覚」——が、注意的再認の一種の「極限」形態であることを示す。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (天野 恵美理)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 舟場 保之
	副 査 大阪大学 教授 山上 浩嗣
	副 査 大阪大学 名誉教授 上野 修
	副 査 大阪大学 名誉教授 須藤 訓任
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： ベルクソン記憶論における再認の問題

学位申請者 天野 恵美理

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	舟場 保之
副査	大阪大学教授	山上 浩嗣
副査	大阪大学名誉教授	上野 修
副査	大阪大学名誉教授	須藤 訓任

【論文内容の要旨】

本論文は、アンリ・ベルクソン（1859-1941）の哲学について、『物質と記憶』（1896）および1903-4年度のコレージュ・ド・フランス講義『記憶理論の歴史』（以下、『記憶講義』）を中心に、とりわけ「再認」の問題に焦点を絞り解釈を与えたものであり、序文と4章、および結論からなるA4判95頁（400字詰め原稿用紙換算で約406枚相当）の分量をもつ。

ベルクソンは、『物質と記憶』に先立つ『意識の直接与件についての試論』（1889）において、意識に直接与えられるものの根源性を主張したが、このとき外的対象はそれを知覚する各人に対してそれぞれ独自の仕方で現れることになってしまうため、対象の同一性がいかにして成立するかを説明する必要が生じることになる。この問題に答えるために、ベルクソンは、知覚対象を既知のものとして同定する働きである再認に着目し、これを種別化するのであるが、本論文では、先行研究に見られる瑕疵を指摘しながらベルクソンの議論が丹念に再構成され、最終的に再認の種別化がきわめて明確かつ説得力をもつ仕方で提示されていることが明らかにされる。

まず第1章において、再認の種別化が問題とされるコンテクストが示されたのちに『記憶講義』が扱われ、ベルクソンが最終的に到達した再認の種別化が示される。それによれば再認は、動物にも見出されるような、たんなる身体的自動反応によって知覚を利用するだけの再認（①）、身体運動に規則づけられつつ、対象に即した知的な再認である注意的再認（②）、個人的記憶が出現する再認、すなわち個人的再認（③）の三種類に分類する必要がある。さらに、②が能動的に知覚へと立ち戻り、知覚を明晰化するものとして特徴づけられることによって①とは異なることが、また③が「私の」個人的な過去へと遡る再認であるのに対して、①と②は「非個人的再認」であることが、それぞれ指摘される。第2章においても『記憶講義』が扱われ、再認の種別化から導かれる記憶力の全貌が円錐の図示のうちに確認される。円錐の頂点は①、底面は③、それらの間の断面が②であるが、記憶力の全体を円錐で表すことの意義が、たんなる自動的身体反応に向かわせる力とたんなる夢想に向かわせる力という反対方向のふたつの力の関係として、記憶のヴァリエーションを説明できる点に見出される。そしてこうした説明が、先行研究に対する批判へとつながられる。第3章では、『記憶講義』の知見にもとづき、『物質と記憶』における種別

化の特徴が明らかにされる。『物質と記憶』では、たしかにそれに先行する論文では不明瞭であった②の起動段階(②-①)をベルクソンが意識するようになってきている点、しかし『記憶講義』とは異なり、①と②-①とを区分するまでには至っていない点が、原テキストの精緻な解釈によって詳細に跡づけられる。とはいえ『物質と記憶』における注意的再認は、『記憶講義』におけるものと同様の内容をもつことが第4章において明らかにされる。②は対象の明晰化を目指してなされる再認であり、ベルクソンによって示される回路図は対象の分析・明確化の進展を表すものであって、『物質と記憶』においても再認の説明のために用いられる円錐図が意味するところとはまったく異なっていることが主張される。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、ドゥルーズに代表される従来のベルクソン解釈のように、注意的再認の進展を表す回路図を個人的記憶のすべてを底面とする円錐図と重ね合わせるなら、注意的再認が進展すればするほど個人的ニュアンスをもった記憶が姿を現すことになり、「夢のような」とベルクソンが形容する個人的記憶が外的实在の理解をますます深めることになってしまう点に、至極明瞭な奇妙さを見出すことから出発し、『記憶講義』における完成された再認の種別化に照らして『物質と記憶』を再構成し、奇妙な解釈を批判しつつふたつの図(回路図と円錐図)を整合的に読み解く可能性を提示する、斬新かつ野心的な試みである。2018年に公刊されたばかりである『記憶講義』を扱う本論文は、ベルクソン研究の最前線に位置するが、論述はきわめて精緻であり、引用を最小限に抑えた上で過不足のない論証が行われ、高い説得力をもっている。

『記憶講義』(そして『物質と記憶』)における円錐図が①を頂点、③を底面とすることによって描いているのが記憶力の全体であり、相互に反対に向かうふたつの力であって、ここですべての記憶の現れのヴァリエーションを説明することが可能であるのなら、円錐図が示しているのは、実際に②が選択され、これが進展するよりも論理的に手前の次元であると考えられる。実際に②が選択されれば、底面に位置していた個人的記憶は脱個人化し、知覚を有益に補う脱個人的な記憶となり、知覚の分析が進められる。記憶力を通じて知覚の分析が進み、外的实在の理解が一層深まるとしても、夢のような個人的記憶それ自体が出現することはありえないことになる。注意的再認とは、「対象をわれわれとして再認する」のではなく「対象を対象として再認する」ことなのである。再認を明確に三種類に分類することによって、奇妙な解釈が行われる余地はなくなるのであって、ベルクソン自身の表面的な記述を度外視すれば、『物質と記憶』にも『記憶講義』と同一の考え方を見出しうる。このようにして、回路図と円錐図を重ね合わせる誤謬が避けられるとともに、「反復」「膨張」「緊張」の二義性が指摘され、本論文のオリジナリティを示すことに成功している。

ただし、『物質と記憶』全体の問題設定において再認の問題がどのように位置づけられるかがあいまいな点には、問題が残ると言わざるを得ない。それはたとえば、純粹知覚の議論と再認論とのつながりへの踏み込みが今ひとつならず、それと対を成す純粹記憶に関する説明も不十分であることや、“vivant”概念の射程が明らかではないこと、さまざまな内容もちうる個人的再認についての分析が十分ではないことといった、具体的な課題が未解決であることを意味する。

このように、本論文にはなお不十分な点が散見される。とはいえ、これらは必ずしも本論文がベルクソン研究の分野において達成した画期的な成果を損なうものではない。本論文によって、『記憶講義』研究という道なき領域に道は拓かれたばかりであり、これらの課題はいずれも将来的には十分に解決が見込まれるところである。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。